

富士山埋経

聖人は北条時宗を始め、十一か所に手紙を出して、蒙古は必らず襲来する、早くその用意を物心両方面にせられよ、と忠告を発したが、聖人に、直接の返答はどこからもなかった。

かくて文永五年は過ぎて、文永六年、聖寿四十八歳を迎えたのである。

しかるに、文永六年の三月蒙古の使者、黒的、殷高の兩人は、対馬にきて、再び国書を提出したのである。鎌倉政府の意を熟知していた対馬の資国は、これをだんこ追い返してしまつたが、蒙古の国使は、手ぶらでは帰れないので、島民の搭一郎、弥二郎兩人を人質としてつれていつてしまつた。この人質はその年の九月に再びきた時に返してよこした。

事態がここまで進展すれば、蒙古の襲来は必然なのであるが、まだまだ鎌倉政府の当事者はこの時分には、軍備の方面でも、あわただしい動きはみえず、ただ、神社仏閣にこのようなことを報告して、御祈禱をたのむ程度であつた。

聖人はそのような鎌倉幕府のこそくな手段を不当として、十一か所に、立正安国論の正非を問

うたのであるが、卑怯にも表だつては一向に相手にならうとはしないのであつた。そして、鎌倉の大寺の住職達は平気で、蒙古退治の御祈祷を行つて、莫大な供養にあずかっていたのである。

蒙古襲来が、かえつて、鎌倉の僧侶達を依食せしめるといふ、奇怪な状態であつた。

文永五年の四月十三日には勅使が、伊勢の大廟に立つて蒙古難をつげた程であるから、その末社はいうに及ばず、すべての神社や寺院において蒙古難の御祈祷がつづけられたのである。聖人からみるならば、蒙古難によつてかえつて誇法の火手が、日本中に上つたようなものである。

かくならんことを恐れて、いづれが正法であるか、公の場所において、諸宗の僧侶と対決をしようとして、懇請の手紙やあるいはまた、挑戦の手紙を十一か所にもだしたのであつたが、陰においては聖人圧迫の手を弄しても、表面にたつて聖人をなじるものは一人もまだでないのである。

この日本の国土をあげて、全国民をあげて、法華経にそむく国になつてしまつた。

聖人の靈感よりするならば、蒙古の襲来は必然である。しかるに、この蒙古退治の一大秘法の法華経に誰人も耳をかそうとはしない。

今、一國累卵のあやうきにあるに、手をこまねいてみておれようか。

聖人は文永六年の六月十五日富士埋経を企てられたのであつた。

文永六年を去る百二十年前の久安五年に、僧末代が、如法書写の一切経を富士山に納めたが、大船若経だけが足りなかつたので、その六百巻を勸進して、あわせて富士山に納めたというの

が、富士山埋経の歴史に現われた最初である。聖人の埋経は、もちろん法華経一部八巻であるが、聖人以後に富士埋経のことをきかないから、富士の埋経は以上の未代と聖人だけということができる。

埋経ということは、一体どういうことを以下説明してみよう。

埋経とは、長く後世に伝えて、末代の人びとに利益を与えんがため、仏教の経文を書写して中に埋かることと、大言海にのせておるが、そればかりではなく、その土地を清浄にするとか、あるいはその土地なり、山なりに魂をいれるとかの意味もあるのである。塔をたててその下に経文をいれたり、あるいは仏舍利と称するものをいれるのである。奈良平安朝時代に寺を建立する時は、その本堂の建立予定中心地に埋経をすることは、往々あることである。これなどは、清浄にするという意味や入魂の意味があるのである。

今、聖人が富士山に埋経するという意味は、日本国に入魂するの意味に解するのである。「一切経に法華経のないことは、山海に玉のないようなもの、人に魂のないようなものである」と聖人はいわれておる。今、蒙古襲来を前にして、日本国中の神社仏閣をあげて勝法の社殿となり終った。諸天善神は、この誇法の国をすてさつて天上にのぼつてしまい、日本国は今からつぽの国であるというのが聖人の考え方である。このからつぽの国に法華経という魂をいれなければ、蒙古を退治することは出来ない。日本国が大事に至らなかつたのは、日蓮がひかえたればこそであ

ると、後年、聖人はいわれておる程である。

法華經法師品には「もしまた人あり、妙法華經の乃至一偈を受持し誦誦し解説し書寫し、この經卷に於いて敬いみること仏の如し（中略）合掌恭敬せば、藥王まさに知るべし 是の諸の人達はずでに、かつて十萬億仏を供養し、諸仏の所に於いて大願を成就し、衆生をあわれむが故に、此の人間に生ぜることを」とあつて、寫經の功德がとかれておる。

埋經とは寫經の結果であるから、寫經を語らずして埋經だけを語るのは、不都合と思つて、少しく紙數をもらいたい。印度、支那のことは省略して日本のみにするならば、わが国では文献の最も古いのは、天武天皇白鳳二年三月「此の月、書生をあつめ、始めて一切經を川原寺に寫す」というのだそうであるから、仏教渡來後百年あまりで、寫經をやる専門家すなわち經生が生まれただのである。当時の仏教の盛んなることを思えば當然といえるが、寺院や僧侶の數も増加したので、必要のせいとばかりいえない。寫經の功德によつて國家を鎮護し、あるいは祖先父母の菩提に資するといったことから出たのである。

當時いかに寫經がさかんであつたかは、昭和の御代になつてもその名残りがあつた。それは、暮になると、畳屋さんと一緒にお世話になる經師屋さんである。經師とは、この寫經所でかかれた經文を卷物などにつくることを業としたものを經師といふのである。ときどき今でも、街中で大經師とかいた看板をみることもあるが、大經師とは寫經所の經師の長の職をするものをいふのだ

から、大経師とかいた看板をみたら、相当な心臓屋だということがいえよう。今では経師屋といったり表具屋といったりするが、表具屋さんの仕事をみていたら、糊づけをのばす道具に、数珠状の玉でこすっていたのをみて、千数百年たつても変らぬものは、変らないと思つたことであつた。なお写経所と関連して今なお、日常生活と密接なものがある。それは、なにかというと洗湯である。洗湯のことの起りは、写経生や経師等が、仕事の前に、身を清めるために使用した浴室なのである。普通、洗湯の話ができれば光明皇后の話がでて、その風呂のことを天平風呂などと呼ぶが、光明皇后は経生や経師が専用していた浴室を改良開放して一般人、特に病人を入れたということから有名であるが、洗湯そのものの起源は、白鳳時代までもさかのぼることができる。だからこそ洗湯に湯殿といったような敬称がつかわれておる。悪口をいうものは、お寺に湯殿があるのは、湯灌をするためだという人があるが、それは間違いである。湯灌というのは、今はやらないから、一寸説明の要があるが、仏教の葬式にさいして死者を棺におさめるにさきだつて、沐浴をさせるのをいう。今は、親族だけでアルコールでふいておる、あれが現代の湯灌だ。さて、その湯灌の風習は、物知り博士、日置先生の説によると、中国で行われるようになったのが宋代以後、わが国では鎌倉時代の末であるということ、徳川時代になると、キリスト教圧迫のために、死体検査と称して、菩提寺の住職に必ず立合わせしめたということである。だから以上の通り湯灌の風習は鎌倉時代の末ということだから、前述の湯殿とはまったく関係のないこ

とである。ついでに付記するが布施所というと無料宿泊所のこと、宿屋の起源もやはり寺院からでているのである。

写経師は光明皇后の天平時代に一番さかんであつて、最初の写経司は写経所となり、それが写経所と写疏所、写後経所の三か所に分れて、写経所は法華経と最勝王経だけを書写し、写疏所は註疏書のみを写し、写後経所は三蔵経を写すという程に分化した程であつた。この中で一番盛んであつたのは、もちろん写経所であつた。何故、法華経と最勝王経だけが専門で書写されたかという、法華経には通一仏土の思想があつて、このわれわれのすむ娑婆が、仏の世界寂光土となるのだという思想があるのである。この考えより、法華経を書写して、土中に埋めるのである。現在発掘された埋経のほとんどが、法華経といつてよいのは、この法華経の特質によるのである。阿弥陀経の写経を埋経したとしても、意味が成立しないのである。西方浄土の世界をえがいた阿弥陀経を、この娑婆世界に埋めてみても到底その意味が成立しない。よつて、阿弥陀経だけの埋経が発掘されたということはほとんどないのである。つぎに、最勝王経がえらばれた理由は、四天王が国家を鎮護するという誓願があるので特に写経されたと思える。

伝教大師が法華経六千部を写して天下に分かたんと発願したのは有名な話である。伝教大師は法華経迹門による戒壇を理想とされ、その滅後弟子によつて実現されたが、戒壇の思想は、法華経の前述の通一仏土（神力品）の思想よりくるので、このわれわれのすむ娑婆世界を浄土すなわ

ち仏の世界にするのには戒壇が必要なのである。戒壇とはいずれゆつくりふれる時があるが簡単にいうならば、仏法の戒をたもつ場所をいうので、日蓮正宗でいうならば三大秘法の戒法をたもつことをいうのである。

伝教大師法華経六千部写経の願業も、その念願とした法華迹門の戒壇建立より考えれば、当然の結果といえるのである。

写経において、日時の長短の極端なのをあげると、後鳥羽上皇は一万三千三百十五僧を招じて、一切経を一日の中に写経せしめたといわれ、鎌倉時代には筑前宗像の良祐という僧侶は一切経を写すのに四十二年を要したといわれておる。これは前者とくらべると、経済力のない方の代表が、その信心によって、一切経を写したという見本である。良祐は仲間の西観と心昭とに、紙墨や銭を勧進させて、自分もつばら経を写し、勧進のためにはついに京都までも上り、良祐は旅行中には立ちながら、歩みながら船に乗りながら写したということで、そのことはその経の奥書きに書かれているということであるが、まことにどうもすばらしい写経で、良祐は二十九歳から始めて七十歳に至る間の四十二年写経をつづげたのである。この一切経は現在は筑前宗像郡田島村興聖寺に四千数百巻が現存されておるといふことである。

父親の三十三回忌に父親からいただいた手紙をすきかえして、これに写経したという孝心の現われの写経が、今なお相州金沢に残っているということである。

埋経する場所については、いろいろな場所があつて、山ばかりとは限つてはいない。小石に一字あるいは数字をかいて一経を書写してこれを海中にいれるということもある。

平家物語に「承安五年石の面に一切経を書いて船に入れて、いくらともなく沈められけり、さてこそこの島を経島と名づけられたり」とある。

平清盛は兵庫の築港にあたつて、人びとに勧進して、石に一切経をかかせこれを沈めて築港の土台にしたという、信仰と実用との話がある。

では、何故、聖人は埋経の場所として富士山をえらんだのであろうか。

聖人は「日蓮は日本の人の魂なり」といわれておるが、富士山はまた日本人の魂であるということが出来よう。法華経は一切経の魂なり、南無妙法蓮華経は日蓮の魂なり、と聖人はいわれておる。日本国に魂をいれる場所を日本人の魂たる富士山に求め、日本人の魂たる聖人が、一切経の魂たる法華経を、書写して埋経したのである。まことに、見事なる埋経ではないか。

富士は万葉の昔から「日の本の大和の、国の鎮め」と山部の赤人はのべて

田子の浦ゆうち出でみれば真白にぞ

富士の高根に雪はふりける

とよんでおることは、あまりにも有名である。

今日一の富士登山のようないことが行われるようになったのゆゑ、ここ五、六十年のことであるとい

われておる。しかも、富士登山はあまりにも便利になってしまったので、今では富士山に登ったのは、登山のうちに入らないといわれておる。槍だ穂高だと騒いでおるのが今日のご時勢だ。静岡県の人にいわせると、富士山は日本一高い山だが、年寄りでも子供でも登れるようにしておりますといっておったから、これは無理もない話である。

しかし昔の登山といえば、地元民が生活の糧を得るために登ったろうが、それ以外は山頂をきわめる者は、ほとんど信仰をもった登山であった。故にその真否はなかなか立証しがたい人もあるが、伝説としては登山者として日本武尊、聖徳太子、役の小角、末代法師、空海、親鸞までもふくんでおるのである。

富士登山信仰の徹底さは、ついに天文年間に、富士講というものが出来て、ついには全国に講社が八百八講あり、徳川時代には江戸市中に十万人ぐらいの信徒があり、加持祈禱をかねて登拝したが、寛保より嘉永には数回禁止令がでたという程である。現在の富士教神道実行教、扶桑教会はこの富士講から分れたものである。

雲は山の肌から生まれるのかしら、みていると、むくむくと山肌から雲が湧きでてくるようにみえる。ここは、富士山の天地の境というところで、ここから上はいつも白雲がかかっておる方

が多いので、天上界、ここより下は山肌がみえておる時が多いので、地上界というのである。

今、聖人は、富士埋経にあたつて、この天地の境という場所をえらばれたのである。

.....

(一説には、吉田口の六合目で御中道の出合点に、日蓮上人百日修業の地と称して、経ヶ岳の六角堂があるが、筆者はこれをとらない。それは、身延日蓮宗が、この六角堂をこしらえたからの説をとらないというのではない。この地点は、その名の示す通り、単に百日修業の場所であつて、埋経の場所ではないのである。そこで修業をなさつたのちに、埋経の地としては蒙古退治御祈念が埋経の目的であるので、その蒙古襲来の方角にあたる百日修業地の吉田口が、ほとんど真裏にあたる富士の南面の天地の境をその場所にえらばれたのであつた。ここは一名また、乳母が懐ともいって、富士山としては風雪の静かな場所であるから、埋経の地としてはまことに理想の地であつて、埋経を永代に伝うるにたる所でもある)

.....

埋経を手伝つた四、五人の衆は、仕事が終わつたので先に出発してしまい、今は聖人とお伴をした弟子の日興の二人が、埋経の地、乳母が懐に立つておられる。四辺は雲がおおっていた。

「お聖人さま。案内人は、今日は絶対に晴れますといいましたが、はずれたようでございます」

「よいではないか。埋経さえ終れば、この日蓮は満足だ。ありがたいことだった」

「でも、せっかく、ここまでできたのですから、上もみたいし、下もみとうございます。これでは富士山に埋経したと申しましたが、まったくの雲の中で、話にきく霊山浄土にでも参ったようでございます」

「日興つ、では、この日蓮が、雲を払って上も下もみせてやろうか」

「ええっ」

「驚くことはないぞ。南無妙法蓮華経と唱えればよいのだ」

「南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経」

「これこれ、立ちどまってはならぬ。あるきながら唱えなさい。おくれれば、先にでかけた連れの人びとが心配しよう」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

聖人も日興も共々に唱題した。やがて、前方の雲の中からも、唱題が起った。先行した人びとに唱題の声が通じて唱え始めたのであろう。山にこだまする程の唱題となった。

題目の声につれて、雲はやがて霧となったが、霧となったかと思うと、不思議不思議、はつきりとわが脚下がみえ始め、あつと思う間にその脚下の地はみるみる広がって、上は青空に接する山頂につづいたかと思うと、下は眼をすいこむ程に下り下ってわずかな白雲をへだてて、駿河の

海がはつきりとみえ、たくましい姿の伊豆の半島が、その駿河の海につきでていた。静かな景観の中に、動いてみえるのは、富士川が海に入るあたりの白い波頭だけであった。

「お聖人さま御覧なさいまし、今埋経したあたりが、光っております」

雲を破った、強い夏の陽差しが、露をふくんだ、岩肌をなぜか金色に照りかえしていたのである。

日興は後年、富士一跡門徒存知事に「駿河国の富士山は広博の地なり（略）且つは日蓮大聖人の本願を祈る所なり」と述べておるが、筆者はこれを富士山埋経のこととみたいのである。

この年すなわち文永六年より、六百八十四年後の、昭和二十七年（開宗七百年）七月十八日のことであるが、大日蓮七十八号をここに引用しておきたい。

「海技二千五百米、富士表口五合目から「一天四海皆帰妙法」の第一声をあげた、大宝塔建立法要はさる七月十八日つつがなく厳修された。開宗七百年記念法要期間内であることと、法主自ら登山するという、日蓮正宗はじまって以来の大壮挙だけに、全国数十万の檀信徒から大きく期待されていたが、当日は折悪しく天候にめぐまれず、二合目バス終点からは時々襲うしゅう雨をついで登山した。

管長水谷日昇上人（七四寿）はじめ、宗務総監高野日深師、宗務役員、布教師、全国末寺住職代表等三十余名、全国檀信徒代表十余名、登山連合会理事、観光協会役員など五十余名が大型バ

スに分乗、三門を出発した。二合目でバスをおりた一行は、下駄ばきにコーモリ姿の御法主上人を先頭に登山、五合目についたのは午前十一時半であった。少憩の後、法主上人執筆のもとに心魂うちこむ「南無妙法蓮華経立正安国世界平和之宝塔」と大書された、宝塔に向って読経唱題、その昔、宗祖日蓮大聖人が、富士山を中心に世界に向って法華経の布教を行おうとして登山、経文を埋めて下山したと伝えられる古蹟、経が岳にその宝塔を打ちたてて一回下山した」

この時、筆者も随行して、その法味を等しくなめて感激したのであるが、その時五合目の室で、何故この辺を経が岳というかとの揭示を読んだのを覚えておる。

前述の乳母が懐といえる地から、大正の大震災の時に、土地がくずれて、法華経の埋経が、あらわれた。鑑定の結果、つくりや文字等は、鎌倉時代のものに相違なしとして、現在上野博物館に保管中とあった。この時五合目で、日蓮聖人と富士山という講演を筆者はしたが、生涯中、一番高いところでした演説であると思っている。

